

Vertaald door Etsuko Nozaka in Japans

『アラブのおとぎ話 (Arabische Sprookjes) 』

ロダーン・アル・ガリディ文&ヘールチェ・アールデルス絵

おとぎ話の収集家 De sprookjesverzamelaar

この本を読む目を持ち、この本をしっかりとつかむ温かな手を持つみなさん。私たちの素晴らしい惑星にこれまで存在したなかで、おとぎ話は最高の旅人であり、もっとも成功した移民です。もしみなさんが、オランダのチーズ(原文はjonge kaasですが、日本人にはわかりづらいので意識)をイラクに持っていったら、むこうの人は「これはオランダのチーズだ」と言うでしょう。もし私がオランダの木靴をスリナムに持って行ったら、むこうの人は「ああ、オランダの木靴ね！」と言うでしょう。

でも、イラクや、あるいはスリナムへ渡るオランダのおとぎ話となると、話は違います。それはイラクやスリナムのおとぎ話になります。というのも、おとぎ話は境界や国や言語、アイデンティティ、文化にとらわれないから。おとぎ話はすべての人のものであり、すべての人のためにあるのです。

そんなわけで、みなさんはこの本のなかで、長い旅をしてきたおとぎ話に出会うでしょう。もともとロシアの話もいくつかありますが、私がイラクでその話を聞いたとき、それはイラクのものになっていて、「イワン」は、「ムラット」に代えられていました。

ほかの話はたぶん、ドイツか、アフリカか、トルコから来たもので、私はそれ

がイラクのものではないということを知りませんでした。

一種のおとぎ話収集家として、私は自分の子ども時代や、文学、歴史のなかから、もっとも美しい話を探し求め、自分自身のスタイルで書き直そうと試みしました。それでこれらの話は私個人の物語ではなく、みんなの物語なのです。

どうか存分に読むのを楽しんでくれますように、そして私の話がこの地のおとぎ話になるよう、チャンスを与えて下さればと願っています。気軽に、（補足：お話に出てくる）人の名前を変え、別の花や波、窓や扉を選んでみてください。なぜならお伝えしたように——おとぎ話は最高の移民、最上の旅人ですから。おとぎ話を、みなさんのものにしてください。

ロダーン・アル・ガリディ

P15

ヤマウズラ*と亀

（*イワシャコの意味もある）

むかしあるとろに、亀だけが住んでいる島があった。亀たちは、もう長いあいだ、そこで幸せに暮らしていた。というのも、島には果物の木や食べられる植物がいっぱい生えていたからだった。亀たちは一日じゅう食べ物を探し、夜になる頃、そろって自分たちの住みかへもどっていった。

けれどもある日、ふしぎなことが起こった——なんの前触れもなく、一羽のヤマウズラが、島に降り立ったのだ。なんという奇跡！ なんと驚くほど美しいものなんだろうと、亀たちは思った。こんなに美しいものを、亀たちは今まで見たことがなかった。

大海原の上を高く飛んでいたヤマウズラは、暑さと疲れにやられて、はるか下にある緑の点に降りてきたのだ。それは、亀の島のような島だった。

亀たちはその素晴らしい訪問に感謝して、愛情深く、親身になってヤマウズラを迎え入れた。

亀のもとで居心地よく感じたヤマウズラは、留まることにした。ヤマウズラと亀は、大変なかよくなった。日中、ヤマウズラは食べ物を探しに飛び去ったが、夜になると、眠りにもどってきた。

しばらくたつと、亀たちは日中ヤマウズラがいないことが、さみしくなり始めた。彼に会うのは夜だけなので、亀たちはたがいに言いあつた。「ああ、ヤマウズラの眼差しなしでは、生きることができないわ（反語的に意識）。島にあるもので、一番美しいのは彼なのに、飛び去ったとたん、私たちはその美しさを失ってしまう。私たちの島は美しいけれど、ヤマウズラはそれをもっと美しくしてくれる。ずっとそばにいてくれたら、どんなにいいでしょう……暗くなってから、いるだけじゃなくて……ここにいてもらうために、どうしたらいいのかしら……あの方が飛び去ってしまい、二度と会うことがなかったら……」

「姉妹のみなさん」ほかの亀より自分は賢いと思っている、一匹の亀が言った。「ずっといてほしいと、私たちはヤマウズラにお願いしないといけません。ずっといることが愛の証であり、あなたもくつろげるだろうって。私がなんとかします」

「もし、うまくやってくれたら、あたしたち、あんたに永遠に感謝するわ！ 好きなだれかといつもいっしょにいる、それ以上すてきなことはないもの」

その晩、なにも怪しむことなく、ヤマウズラはもどってきた。亀たちはヤマウズラのまわりに群がって、おかえりなさいと迎え入れた。ほかの亀より自分は賢いと思っている亀が、進みでた。

「愛するヤマウズラさん、あなたがいなくて、私たちは今日すごくさみしかった！ またお会いできて、ほんとにうれしいの！ この島は、あなたがいないと、いいところじゃありません。あなたは私たちの大親友！ そして大親友は、いつもいっしょじゃなくちゃいけないでしょ？なのに、あなたは明るくなったとたんになくなり、遅くなってからもどって来る、私たちがもう眠っているところに。私たちは大親友なのにいっしょにいない、それがやっぱりつらいんです！」

「ぼくだって、君たちがいないとさみしいさ。だが、ぼくは鳥なんだ。鳥は食べ物を探しに飛び去ることしかできなくて、ぼくにはそのための翼もある。そして鳥は夜、眠るときしか、休息しないんだ」

「だけれど、大好きなヤマウズラさん……どう言いましょう？ ええ、あなたは鳥よ。でもその翼があなたになにをもたらすの？ 行ったり来たりしても、お返しに得られるのは、ほんのわずか。どの生き物にも、いちばん大事なのは、まさに休息です！ そのために、私たちのところに降りてきたんでしょ。あなたにもふさわしい休息が得られるように、私たちは友だちになったんでしょ。もしあなたが墜落して、食べられてしまったら？ そうなったら、もう二度とあなたには会えないわ！」

「だが、いったい、ぼくになにができる？」と、ヤマウズラはたずねた。

「私、解決策を知っているの——あなたの翼から羽を抜くんです！ そうすれ

ば、二度と飛び去れないし、いつでも私たちのあいだにいることになる。もう高く飛ばなくていいんです。私たちのところにおいて、私たちと一緒に食べたり飲んだり、寝たり起きたりする。言ってみれば、私たちのひとりとしてね」
亀たちの言う通りだと、ヤマウズラは思った。ここで、友だちのあいだにずっといられるのなら、わざわざ行ったり来たりしなくても、いいじゃないか？

ヤマウズラは、自分の翼から一枚ずつ羽を抜いた、亀たちがもう十分だと言うまで。くちばしが届かないところにある羽は、亀たちによって引き抜かれた。その日からヤマウズラは亀たちのあいだで暮らし、大地の恵みと休息を楽しんだ。

けれども……ある日、イタチが現れた。イタチは枝のあいだにいるヤマウズラを見て、考えた——あそこに見えるのはなんだ？ うまそうな、たっぷり太った鳥だ。おまけに羽も無いぞ（or羽もむしってあるぞ）！ イタチは、自分が夢を見ていないことを確かめようと、両目をこすった。そのあとヤマウズラにとびかかって、つかまえた。

ヤマウズラは甲高い悲鳴をあげながら、叫んだ。「助けて！ 食われてしまう！
助けておくれ、友だちの亀さんたち！」

イタチを見た亀たちはおびえて、甲羅のなかにさっと身を隠していた。

「ぼくを助けて！」と、ヤマウズラは叫んだ。「なんとかして！」

「イタチに対して、私たちになにができるって言うの？ なんにもできない！」

亀たちは叫び返した……そう、悲しみに満ちた声で。

ヤマウズラは、亀たちが自分を救えないことを理解した。「それはきみたちのせいじゃない、愛するみんな。ぼく自身の愚かさのせいだ。ぼくはこの運命を受け入れよう、だって、ぼくが、きみたちの言い分を聞くことを選んだのだから。ぼくは自分で、羽を引き抜いたんだ、あの羽があれば飛びたつこともできたのに。あんなことをしていなければ、イタチだって決してぼくをつかまえられなかった。ぼくはきみたちを責めない。もう一度言おう——これはきみたちのせいじゃないよ」

自分でも驚いたことに、最後の力をふりしぼったヤマウズラは、イタチの口から身をほどいて、逃げ出すことに成功した。ヤマウズラを、ものほしそうに見送ったイタチは、その姿が目の前から永遠に消えてしまったとき、こう叫んだ。

「羽をぜんぶ引き抜いたのが、おとぎ話のなかでよかったな、現実じゃなくて。現実には、まるはだかのヤマウズラは、おれの口から逃げられやしないんだ！」

ヤマウズラは大急ぎで羽をふたたび生やすと、そのときから、またときおり飛び去るようになった。けれども夜になると、たいていは島にもどってきた。そして亀たちには、それで十分だった。自分たちのために、ヤマウズラに変わってほしいと言い出すことは、二度となかった。

P23

満足しない男

むかしむかしのある日、国の王様は、自分が通りかかると、だれもがかならずお辞儀をして、やっていたことをやめてしまうのに、とつぜんうんざりした。

自分について、だれもが愛想のいいことだけを話すのにもあきあきして、国の人々が、王様が近くにいないと実はどんなふうか、知りたくなった。

自分の臣民を、よりよく知るときが来たのだと心に決め、王様は古着を身につけて、ふつうの人を見つけにいった。

王様がやってきた村には、望む限りのものをなんでも持っているのに、決して満足しない男が住んでいた。服は立派だし、広場に面したとてもたくさん部屋がある大きな家の持ち主で、美しい庭は花でいっぱい。そして村はずれには菜園付きの小さな農家まで持っていて、そこで男はあらゆる作物を育てていた。けれども、どんなに豊かでも、男は満足していなかった。

王様が通りかかった当日、その満足しない男は、家の前のベンチにすわっていた。男は王様に、親し気にうなずきかけた。通りかかったのが王様だとは、もちろん知らなかった。

古着を着た、あわれなよそ者を見かけて、男は気の毒に思ったのだ。腹は減っていないか、喉は乾いていないかとたずね、王様が、ああ、なにかほしいと言おうと、男はパンとミルクを与えた。

次の日、王様はその村にもどり——今度は、頭に王冠を載せ、王様らしい服装で——そして男の家の扉をたたいた。扉を開け、王様が立っているのを見ると、男はすぐにうやうやしくひざまずいた。

「立ちなさい、さあ」と、王様は男に話しかけた。「昨日、私は古いぼろを身につけて、このあたりをうろついていた。どこから来たのか、調子はどうかと、私に声をかけるものはだれもいなかった、おまえ以外はな。

それからおまえは、腹が減った、喉が乾いたと私が言うのを聞いて、食べ物と飲み物を与えてくれた。だから今度は私がおまえに、お返しを贈ろう。

村を出て、できるだけ遠くまで走っていき、もうこれ以上先へ行けないというところで、止まるがいい。

私たちが今立っているところから、おまえが止まったところまでの土地はすべて、おまえのものになるだろう」

男は聞いたことが、信じられなかった。そしたら、私は村で一番の金持ちになる、と思ってうれしかった。自分がか**なり**のものを持っているのはわかっていたが、今日からついに、満足できるようになるのだ。「私の人生で最も幸福な日です」と、男は王様に答えた。「いつ、始められます？」

「今だ！」と、王様は言った。「走れ、できるだけ遠くまで！」

男は走り出した。通りや路地を抜け、家々や農家を通りすぎて村を出た。ときどき後ろを振り返って、男は思った——いや、まだ十分じゃない。

振り返っても、自分の家の壁や、村のヤシの木がもうとっくに見えなくなっていたが、男はそのたびに思った——いや、まだ十分じゃない。

男はナツメヤシの木立や、ヤギが茂みの草を食べている野や畑を走って通った。先へ先へと走ったが、振り返るたびにこう思うのだった——がんばれ、もう少し遠くだ、まだ十分じゃない！ 息が切れはじめ、足の筋肉がずきずきしだしたが、男はまだ満足しなかった。目を地平線に向けて、ただひたすら先へと走ろうとした。自分の足や（**オランダ語**では**benen**、**voeten**ですが**日本語**には対応

する言葉がありません) 肺のことなど考えずに、遠くへ走るほど、自分のものになる土地について考えていた。男は自分の体を感じなくなるまで走り続けた。すべてを失うまで走り続け……。満足しなかったので、男は持てるものをすべて失った。倒れて死んでしまったからだ。

「人は自分もっているものに満足すれば、それで豊かなんだよ」

その村の人々はおたがい、常にそう言いあつた (or 常にそう言いあうようになった)。そして、もしだれかが、それは本当じゃないと言いはると、その村にむかし住んでいた、満足しない男の話をもみんなは語るのだった。元気いっぱい、しかも金持ちだったのに、満足しなかったせいで、倒れて死んだ男の話。

P29

きびしい長老

イスラム教徒に言わせると、神はカアバ (註: メッカにある建造物で、イスラム教の最高の聖地とされる) という聖殿を創られたそうだ。あらゆる肌の色や言語のイスラム教徒がすべて、彼らの心を結びつける唯一のもの、つまり神への愛を抱いて、その周囲をまわれるように。

そんな、カアバを取り巻く果てしない砂漠の中に、むかし、ひとりのイスラムの長老が住んでいた。日に五回入浴し、コーランを読み、神こそが唯一の最も偉大な方だとよく言っていた。けれども、その御方を愛する代わりに、彼は神を恐れていた。神の言う通りにしたものは天国に行けるが、そうしないものは

地獄行きで、そこで千年も焼かれるのだと、昼も夜も、長老はだれにでも繰り返し言っていた。その長老は、とんでもなくきびしい人だった。それでだれひとり、まったくだれも、神は愛なのだと、彼を説得することができなかった。神は、だれかが自分を恐れることを望んではいないと。そして自分を愛することを望んでいらっしゃるのだと。

ある日、そのきびしい長老が道を歩いていた。すると自分の天幕の中で祈りをあげる羊飼いの声が聞こえ、長老は立ち止まって耳を傾けた。

「おれの愛する立派な神様。おれはうちの羊やヤギより、あんたが好きです。うちのラクダより、大事なロバより、もっとあんたが好きです。ああ、愛する神様、あんたおれの宝だ。けど、あんたはどこにいるんだい？ おれはあんたの世話がしたい。あんたの靴を磨いて、ピカピカにしたい。あんたの汚い服を洗い、洗濯ひもにかけて干したい。あんたの髪の毛のシラミを残らず殺してあげたい。そして、うちでいちばんいい雌牛の、いちばんうまいミルクを、あんたに注いであげたい。

ああ、神様、あんたはどこだい？ 教えてくれ、そうすりゃおれはあんたの家をかたづけて、掃除ができる。あんたはやさしくて、なにに対しても、だれに対しても正しいし、おれは自分の笛や杖より、あんたが好きなんだ」

そう羊飼いは祈りをあげ、その祈りは彼の心から、じかに出たものだった。

きびしい長老は、耳を傾けながら、次第に腹を立てはじめた。怒りにほほをふくらませ、（補足：見開いた）目は眼窩から飛び出しそうなほどだった。

ひたいに浮かんだ血管は赤くふくらみ、手のふるえがだんだん激しくなった。

長老はテントに歩いていき、羊飼いにむかってどなり声をあげた。「ばかものめ！ まぬけめ！」

ふるえあがって、テントからよろめき出た羊飼いは、そのあいだに（補足：怒りのあまり）顔じゅうが紫色に変わったきびしい長老を見つめた

「おまえはいったい、だれと話しているつもりなんだ？！ ひどくぶしつけで、ひどく下品に！ 天と地を創られた神が、ご自分の世話もできないと思っているのか？ 全能なる御方が、御住まいの掃除に、おまえを必要としていると思うのか？ 雌牛の糞の臭いがする無知の羊飼いを？ 神が靴を埃まみれにすることがあると思うのか？ あの御方が、おまえの洗える服を持っているとでも？ 神がシラミのたかった髪を生やし、一日中、御自分の頭をかいている、おまえはそう思うのか？」

きびしい長老は、自分の杖で羊飼いの頭をたたきながら、叫び続けた。「二度とそのように、神に話してはならぬ！ さもないと、神はおまえに腹を立てるばかりか、地上すべてに罰を下されるぞ！」

羊飼いは、かつてないほど自分の暮らしを悔やみ、かつてないほど不安を覚えた。そして、ひざまずいたのだ。今度は神様のためではなく、長老のために。羊飼いは、すすり泣きながら言った。「ああ、お願いします。神様に対して失礼だったおれを、どうか許してください」

長老は、羊飼いをさらにたたいた。「ばかもの！ これで、おまえは神をいっそう怒らせてしまったぞ。おまえは、私にひざまずいて許しを請うている、神にではなく！ 神のためにひざまずけ！ 神に許しを請うのだ！」

文句をいいながら、長老は先へ向かったが、それから長いあいだ、羊飼いの泣

き声と許しを請う声が、後ろで聞こえていた。

その晩、長老が眠ると、彼の夢に神が現れた。神はとても悲しまれていた。きびしい長老のまえに立つと、神は言われた。「どうして私がこれほど悲しんでいるのか、おまえにわかるかい？ なぜなら、おまえのしわざのせいで、私はいちばん立派で、いちばん純粋な信者を失ったのだ。おまえによって、私は羊飼いの心を失ったのだよ」

長老は、泣きながら目を覚ました。羊飼いのところへ引き返すと、そのまえにひざまずいて、こう言った。「お願いだ、羊飼いや、私を許し、どうやったら神のために正しくいられるか、教えてくれ」

P43

ライオンと雄牛

母さんがお話を語り終えないと、ザーラは眠れなかった。ザーラはお話が大好きだったのだ——お話がすてきならすてきなほど、ザーラはぐっすりと眠った。母さんは、ほかでは聞けないお話を——短いのも長いのも、美しいのやわくわくするの、謎めいたのやゆかいなのも——語ることができたし、その温かな声が先に続くあいだ、ザーラの黒い髪をなでてくれた。おそらくそれが、お話を語ってもらうことの、一番楽しいところだったかもしれない。

「母さん、光と闇の違いって、なんなの？」ザーラはある夜、そうたずねた。

「それは、そんなに難しくもないわ」と、母さんは言った。「光のなかで、心は生きる道を見つける。闇のなかで、心は安らぎへの道を見つけるの」

「あたしにはわからない、母さん。そのことについて、お話を語ってくれない？」

そしてもちろん、母さんはお話を知っていた！

「長い一日の終わりに、農夫は、自分の雄牛を家畜小屋に入れました。日の光に恵まれた、良い一日でしたが、今は暗い雲が大地の上をおおっています。早くも雨が降りはじめました。一滴、二滴ではなく、その晩はバケツをひっくり返したような雨が、空から地面に降り注ぎました。

農家が立っているのと同じ谷に、一頭のライオンが住んでいました。ライオンは雨が降り始めると、怒ってうなりました。うんざりだったのです。だって、ライオンのたてがみは、あつというまに雨水にびしょ濡れになるでしょうし、そうなったら一晩中、寒さにふるえることになるでしょう。そう思うやいなや、ライオンは家畜小屋のほうへ歩きだしました。あそこで雨宿りさせてもらおう、とライオンは考えていました。長いあいだじゃなくて、ほんのしばらく、雨がやむまで。そうすれば、濡れもしないし、寒くもない（直訳は「体は乾いて、温かなままだ」）。

ライオンは、そっと静かに、家畜小屋の中へしのびこみましたが、雄牛はすぐに気がついて、雨の中、外へ走りだしました。というのも、喰われてしまうより、濡れて寒いほうがましだったからでした。ライオンはそんなの別にかまいません。わらの上に頭を乗せると、すぐにすやすや眠ってしまいました。

農夫のほうも、ベッドで寝ていましたが、外の激しい雨音を聞いて、自分の雄牛がどうしているか、ちょっと見に行くことにしました。

農夫は闇のなかを歩いて家畜小屋に入ると、手探りで動物のほうへ行きました。

頭を見つけ、たてがみと、丈夫な足、そしてしっぽを触り、雄牛はまったく問題ないと、すっかり安心しました。

ライオンはその間に目を覚まし、闇のなかで息をひそめて、心のなかでこっそり笑っていました。ああ、あわれな農夫だと、ライオンは思いました……あいつは、自分が今、なにを、だれをなでているのが、ぜんぜんわかってない。おれを自分の雄牛だと思っているのだ！ あたりは真っ暗闇で、闇は農夫に安らぎを与えました。けれども、わずかでも光がさしたなら、農夫は恐ろしさのあまり、その場で気絶してしまったでしょう。

そのぐらい、光は大事だし、闇は安らぎを与えるのです」

母さんは、ザーラの黒い巻き毛を、もう一度なでました。

「ありがとう、母さん」と、半分眠りに落ちつつ、闇のなかから少女は小声で言った。「これで、あたしにも光と闇の違いがわかったわ。これで、ゆっくり眠れるわ」